

長谷川如是閑と対外発信

——英文による日本文化論を手掛かりに——

望月詩史

はじめに

本稿は、評論家として活躍した長谷川如是閑（1875-1969年）の英文による日本文化論を対外発信¹⁾の観点から再考する。

さて、長谷川思想に関する研究は、1910年代から1920年代を対象としたものが多い。その理由として考えられるのは、この時期の長谷川が、痛烈な国家批判を繰り広げたことである。主著『現代国家批判』（弘文堂書房、1921年）では、「国家の神話学」を批判して、観念的國家の「現実暴露」を行い、そして、「国家の博物学」を通じて「生活事実としての国家」の存在を提示した。また、「闘争」と「支配」に特徴付けられる「国家」と「互助」と「共働」に特徴付けられる「社会」を区別し、「闘争」に立脚している國家を「互助」に立脚する國家に改造する運動（「社会化」）が必要であると主張した²⁾。

徹底した国家批判の印象が長谷川の思想像に付きまとうため、一見すると、

1) 「プロパガンダ」（対外宣伝）と区別したのは、この言葉には、「情報の組織的な流布」の意味だけでなく、「偏りのある、あるいは誤解を招く方法」を用いて政治的主張や見解を宣伝したり、情報を流布したりする意味も含まれるからである（*Oxford English Dictionary* オンライン版 (<https://www.oed.com/>)、「propaganda」項目参照）。長谷川がこうした方法を批判していたことは、第1章第2節で明らかにする。

2) 長谷川の「社会」観については、織田健志「『国家の社会化』とその思想的意味——長谷川如是閑『現代国家批判』を中心に」（『同志社法学』第56巻1号（2004年5月））を参照されたい。

それが影を潜める1930年代以降の彼に対する評価は芳しくない。例えば、丸山眞男は、この時代の長谷川について「戦時中はなしくずし転向なのです」、「そのラジカリズムの後退は非常な失望ですね」と評す³⁾。「転向」「後退」という印象を強化させたのが、長谷川の日本文化論である。こうした印象を抱く論者は、1933、34年を思想の「転向」が起こった時期と位置付ける⁴⁾。しかし、日本文化への関心は、例えば、1930年の本居宣長論（長谷川如是閑「自然主義者としての本居宣長」『改造』1930年3月号）に見られ⁵⁾、また、1920年代にもその端緒を見出せるという指摘もある⁶⁾。現在、長谷川の日本文化論は、「転向」もしくは戦争や狭隘な日本文化論（「日本主義」「日本精神」）への「抵抗」・「批判」⁷⁾という二者択一ではなく、思想内在的に検討されるのが一般的であり、日本文化への関心と国家批判を展開していた時期の思想との間に連続性を見出している⁸⁾。

これらの研究を通じて、長谷川の日本文化論の輪郭をかなりの部分明らかにしてきた。しかし、見落とされてきた側面もある。それは、ある時期より、

-
- 3) 「如是閑さんと父と私——丸山眞男先生を囲む座談会——」、長谷川如是閑著作目録編集委員会編『長谷川如是閑——人・時代・思想と著作目録』（中央大学、1985年）、308頁。
 - 4) 山領健二「ある自由主義者ジャーナリスト・長谷川如是閑」（『共同研究 転向・上』（平凡社、1959年）所収）、Andrew E. Barshay, *State and Intellectual in Imperial Japan: The Public Man in Crisis*, University of California Press, 1988.（アンドウルー・E・バーシェイ（宮本盛太郎監訳）『南原繁と長谷川如是閑——国家と知識人・丸山眞男の二人の師——』（ミネルヴァ書房、1995年）、平石直昭「如是閑の「日本回帰」について」（『長谷川如是閑集 第七巻』（岩波書店、1990年）所収）。ただし、「転向」の見解は異なる。山領はマルクス主義放棄、バーシェイは左翼との決別、平石は自由主義への接近を指す。
 - 5) 池田元『長谷川如是閑「国家思想」の研究——「自然」と理性批判——』（雄山閣出版、1981年）。
 - 6) 田崎嗣人「日中戦争前における長谷川如是閑の日本文化論」、『国際公共政策研究』18巻1号（2013年9月）。
 - 7) 田中浩『長谷川如是閑研究序説——「社会派ジャーナリスト」の誕生』（未來社、1989年）、同『近代日本と自由主義』（岩波書店、1993年）、平石、前掲「如是閑の「日本回帰」について」。
 - 8) 前掲の池田、田崎以外に、米原謙、長妻三佐雄、織田の研究がある。米原は「生活事実」概念の危うさを指摘する（『国体論と市民宗教のあいだ——ナショナルリティをめぐる——』（『法学雑誌』第48巻第1号（2001年8月））、『近代日本のアイデンティティと政治』（ミネルヴァ書房、2002年）、49-50頁）。長妻は、長谷川が長年抱き続ける「根源的な喪失感」の影響を挙げる（『日本の性格』前後の長谷川如是閑——その伝統観と「日本文化論」を中心に——）（『社会科学』

長谷川が外国人の日本理解を正したいという意図を持ち、実際に行動に移したことである。それが、外国語（特に英語）による日本文化論の積極的な発信である⁹⁾。筆者はこの発信を対外発信と捉えるが、これに対する関心は、長谷川に限られたものではなく、1930年代前半に官民双方で高まっていた。自由主義者に限定しても、英文による対外発信を重視する人物が少なくない。そこで、本稿では、長谷川の英文による日本文化論の論説に焦点を当てつつ、これまで注目されなかった1930年代における自由主義者の言論活動の一面を解明したい。

第1章 正しき日本理解を促すための対外発信

第1節 日本及び日本人の「自由」に対する脅威

1930年代以降の長谷川に対する否定的な評価は、同時代の自由主義者をめぐる評価と通じる。ここでは、石橋湛山（1884-1973年）を一例に挙げる。彼の思想は、「小日本主義」として体系的に理解されるが、例えば、満洲事変及び満洲国建国をめぐる石橋の態度を踏まえて、「小日本主義」の「崩壊」¹⁰⁾、「放棄」・「転向」¹¹⁾と評価されたり、1930年代のそれが「後退期」に

第69号（2002年9月）、『公共性のエトス——三宅雪嶺と在野精神の近代——』（世界思想社、2002年）、153頁）。そして、1933年以降も「民衆の「生活」を重視して、社会生活のための国家という視点」（同前、169頁）を持ち続けた。織田は、1933年以降も「[国民性]（ナショナリティ）の規範化を明確に拒絶した」（「長谷川如是閑 「生活事実」としてのナショナリティ」（米原謙・長妻三佐雄編『ナショナリズムの時代精神——幕末から冷戦後まで——』（萌書房、2009年）、199頁）点は一貫するが、ナショナリティ論に明らかな変化を確認でき、彼のイデオロギー批判は「国民的性格」に代わったと指摘する（210頁）。そして、その理由を「生活事実」概念の「機能転換」「意味内容の転換」に見出す（同前、214-215頁）。

9) 管見の限り、長谷川の日本文化論が、外国人の日本観を正す意図を持ち合わせていたことに触れたのは、嘉治隆一（「解説」『世界教養全集6』（平凡社、1962年）、127頁）とパーシェイ（前掲『南原繁と長谷川如是閑』、281頁）である。

10) 江口圭一「山東出兵・「満洲事変」をめぐる」井上清・渡部徹編『大正期の急進的自由主義——『東洋経済新報』を中心として』（東洋経済新報社、1972年）、389頁。

11) 松尾尊允「十五年戦争下の石橋湛山」、『政治学年報 近代日本の国家像』（岩波書店、1983年）、

区分されたりする¹²⁾。確かに、石橋が1920年代まで唱えていた軍備撤廃論や植民地放棄論は影を潜める。それどころか、制限付きながら軍事費の増加を容認したり、植民地の領有を肯定したりする。この対照性が、「後退」と映ると考えられる。しかし、長谷川や石橋の1920年代までの言説を、彼らの思想の到達点もしくは頂点と見なすのは妥当なのか。

多田道太郎は、日本の「自由」概念は、「多義的」よりも「あいまいな」の形容詞がふさわしいと指摘¹³⁾した上で、自由主義者の特徴を「みずからは「絶対の真理」を立てない。同時に他からの限定をきらう。あらゆる主義について自由でありたい。そして自由主義者と呼ばれることにさえ反対する¹⁴⁾点に見出した¹⁵⁾。この指摘は、1930年代日本の自由主義者の思想を考える上で示唆に富む。例えば、1930年代前半から繰り広げられた「自由主義論争」¹⁶⁾において、マルクス主義や国家社会主義などから自由主義の「没落」が唱えられたが、その際に自由主義の曖昧さが指摘されていた。戸坂潤は、日本の自由主義は思想体系ではないという意味で「自由主義的気分」と表現した¹⁷⁾。日本の自由主義は、「あいまい」であり、「気分的」な性格を持っていたとすれば、長谷川ら自由主義者の言説が、時代状況に応じて変化するの

214頁。ただし、松尾は、「小日本主義」の旗印を下ろさざるをえなかった」と述べつつも、「政府に迎合せずに、しかも合法的存在を保つという「芸」とねばりも、抵抗の一種として評価に値しよう」と評価する(同「解説」『石橋湛山評論集』(岩波文庫、1984年)、309頁)。

- 12) 増田弘『石橋湛山研究——「小日本主義者」の国際認識——』(東洋経済新報社、1990年)参照。
- 13) 多田道太郎「日本の自由主義」、多田道太郎編『現代日本思想大系18 自由主義』(筑摩書房、1965年)、13頁。
- 14) 同前、17頁。
- 15) 多田は、長谷川を日本の自由主義者を代表する存在、いわば「自由主義の「原点」」と位置付けた(同前、45頁)。
- 16) 同論争については、石田雄『日本の政治と言葉上 「自由」と「福祉」』(東京大学出版会、1989年)、田中、前掲『近代日本と自由主義』、松沢弘陽「自由主義論」(朝尾直弘編『岩波講座 日本通史』(岩波書店、1994年)所収)、上田美和『自由主義は戦争を止められるのか——芦田均・清沢洌・石橋湛山』(吉川弘文館、2016年)を参照されたい。また、論争の目録は、松田義男編「昭和期「自由主義」論争主要文献(1930-1941年)」(2018.4.19改訂)が詳しい(<http://ymatsuda.kill.jp/>)。
- 17) 戸坂潤『日本イデオロギー論』(岩波文庫、1977年)、411頁。

は不思議ではない。それに加えて、ジャーナリストという職業もこうした性格を補強していたと考えられる。「病の療法は、目今現に政治家の仕事なれば（中略）余輩はただその病の容体を示したるのみ」¹⁸⁾ という福沢諭吉の言葉を参照すれば、ジャーナリストの役割は、批評を通じた診断である。しかし、福沢自身、診断と同時に処方箋（問題解決の方法）を提示していた。ジャーナリストも同じく、時々刻々と変化する情勢を診断し、それに伴って生じる問題を解決するための処方箋を提示していた。そして、その処方箋が有効性を持つには、情勢の変化に適応できるだけ柔軟性が必要になる。さもないと、提示された処方箋は有効性を失うからである。このように考えれば、ジャーナリストの言説が時々状況に応じて変化を見せるのは自然であり、ジャーナリストは本質的に便宜主義者（オポチュニスト）といっていよい¹⁹⁾。

だが、ここで問題となるのは、ジャーナリストが、何らかの原則に立脚していたのか否かである。そもそも、政治や経済などの病理を診断するという場合、医学と異なり、客観的な基準が定められているのではない。ある人にとって病理と見えても、別の人にはそう映らない場合があるからである。そうであれば、ジャーナリストは特定の原則に基づいて判断していると考えられる。つまり、言説の変化が「何かを守るための変化」なのか、それとも「無原則な変化」なのかを見極める必要があるということである。

この点からいえば、長谷川ら自由主義者が、1930年代前半に対外発信に関心を寄せたのは、国際社会における日本及び日本人の「自由」を守るためであったと考えられる。その背景には、満洲事変、満洲国建国、国際連盟脱退という政治情勢、そして、日本が金輸出再禁止（1931年12月）以降、円相場

18) 福沢諭吉（松沢弘陽校注）『文明論之概略』（岩波文庫、1995年）、245頁。

19) なお、戸坂潤は、「文学的自由主義者」の特質を論じた際に、自由主義者を「不断の〔便宜〕主義者に他ならぬオポチュニスト」と呼び、また、「固有なオポチュニズム」として理論の非一貫性や無論理性を指摘し、それゆえに、「哲学」を持つことができないと断じた（戸坂、前掲『日本イデオロギー論』、288-289頁）。戸坂の指摘するように、自由主義の本質が便宜主義（オポチュニズム）であれば、長谷川のように自由主義者であるジャーナリストは、その立場が強固であるといえる。

の下落に伴い、輸出を増加させて、世界恐慌に端を発する不景気からいち早く脱しつつあるという経済情勢が絡んで、列強による日本に対する風当たりが強まったことが挙げられる。日本にとって痛手であったのは、列強が経済的打撃を最小限に抑えるため、保護貿易政策を採り、門戸を閉鎖し始めたことだった。しかも、日本に対して「為替ダンピング」や「ソーシャル・ダンピング」の批判が浴びせられた。日本の生きる道は「貿易立国」(商工立国)以外にないと考える石橋らにとってこうした状況は、日本及び日本人の「自由」を制約するものでしかなかった²⁰⁾。

以上を踏まえると、1920年代までの言説を思想の到達と見なして、1930年代以降を後退と捉える視点は有効ではない。また、1930年代前半における長谷川の「日本帰郷」と呼ばれる現象は、同時代の自由主義者の共時的な現象だった。そこで筆者が注目するのは、1930年代の自由主義者に共通する認識と行動である。先ほど、自由主義者の言説の変化を、「日本及び日本人の「自由」を守るため」の変化と表現したが、そこには、国際社会における日本及び日本人の「自由」が脅かされているという状況認識があった。その結果、外国人に対する反発、危機感、苛立ち、そして、憤りといった感情が芽生えた²¹⁾。そして、「自由」が脅かされる原因の一端を外国人の誤った日本観に見出した。したがって、外国人の誤解を解くために、自らが「正しい」と考える日本観(主観的な日本観)を発信することに関心を向け始めたのである。

20) 石橋は、英米が自国内における他国民の自由な居住を制限している点、保護貿易を実施して国際分業を阻害している点、さらには世界の通貨制度の混乱を引き起こした事実を指摘しながら、「恐るべき侵略主義・帝国主義・国民主義に依り全世界の平和を攪乱しつつある」(「日支衝突の世界的意味——連盟委員に寄す——」(『新報』1932年3月5日号「社説」)、『石橋湛山全集 第8巻』(東洋経済新報社、1971年)、74頁)と断じた。また、『東洋経済新報』1933年9月23日号に“An Important Announcement English Edition of the Oriental Economist”(「重要なお知らせ——『東洋経済新報』英文版の発刊)が掲載された。ここでは、「極端なナショナリズム」の勃興とそれに伴う各国の「不幸な政策の流れ」に対する「抵抗」として、英文雑誌の発刊を決意した(拙稿『*The Oriental Economist* 研究序説——創刊初期を中心に——』、『同志社法学』第69巻第3号(2017年7月)、109頁)旨が表明された。

21) こうした感情の高揚は、ナショナリズムの高揚と言い換えても差し支えない。自由主義者のナショナリズムについては、上田が清沢や石橋らを取り上げて検討している(上田、前掲『自由主義は戦争を止められるのか』、108-123頁)。

その方法は、言論活動が中心となるが、海外における講演活動もその一環である²²⁾。言論活動についていえば、情報を発信する「場」が必要になる。長谷川が論説を発表した雑誌に限ってみても、1932年6月に半官機関の日本外事協会 (Foreign Affairs Association of Japan) により *CONTEMPORARY JAPAN* (以下 CJ 誌) が創刊²³⁾、1934年10月に写真家・名取洋之助により対外文化宣伝グラフ雑誌 *NIPPON* が創刊²⁴⁾、そして、石橋が主幹を務める東洋経済新報社から1934年5月に *THE ORIENTAL ECONOMIST* (以下 OE 誌) が創刊された²⁵⁾。このように、1930年代に「場」が整えられていった。

なお、三誌を同列に扱うことに異論があるかもしれない。OE 誌創刊号(1934年5月号)の“FORWARD”では、「本誌はいかなる形による補助金も受けておらないため、自主独立であり、恐れるものは何もない。この事実は広く世に知られている。／『東洋経済新報』は今の世にあふれているプロパガンダ的刊物とは無縁である」(「／」は原文における改行を指す一引用者)と宣言している。確かに、経営面で独立しており、他の二誌と区別できる。しかし、同誌創刊の背景には、日本に対する外国人の誤解を正したいという意

22) 例えば1930年代の清沢洌の海外講演については下記を参照されたい。北岡伸一『増補版 清沢洌——外交評論の運命』(中公新書、2004年)、佐久間俊明『清沢洌の自由主義思想』(日本経済評論社、2015年)、上田、前掲『自由主義は戦争を止められるのか』。

23) CJ 誌は、内閣情報局から相当な情報の提供を受けていたといわれる (Peter O' Connor, “General Introduction”, *JAPANESE PROPAGANDA: SELECTED READINGS SERIES 2: PAMPHLETS 1891-1939, Volume 1: Presenting the Nation, 1912-37*, Tokyo, Edition Synapse, 2004, p. 29.)。

24) 長谷川は、*NIPPON* 創刊当初から、同誌のアドバイザーを務めてきた (*NIPPON*, 23号 (1940年8月)、7頁)。なお名取は創刊に向けて、鐘淵紡績をスポンサーとして獲得するのみならず、1934年に外務省外郭団体として創設された財団法人国際文化振興会や陸軍省、海軍省にもアプローチした (白山真理「日本工房を率いた名取洋之助」『名取洋之助と日本工房 [1931-45] 展覧会図録』(毎日新聞社、2006年)、viii頁)。国際文化振興会は、「文化の宣揚を実現させる「下請け」が必要」という事情もあり、*NIPPON* との関係が密接となって、1935年より継続的補助を始めた (白山真理・小原真史『戦争と平和 (報道写真) が伝えたかった日本』(平凡社、2015年)、7、13頁)。

25) 石橋は、1920年代初めより、英文雑誌の発行に関心を持っていた。結果的に実現しなかったが、自由通信社が発行していた月刊誌 *Japan Financial and Economic Monthly* の編集・経営に加わることで一旦は両社が合意していた (「年譜」、『石橋湛山全集 第15巻 (補訂版)』(東洋経済新報社、2011年)、232-233頁、拙稿、前掲『*The Oriental Economist* 研究序説』、109頁)。

図が存在しており、その点では、他の二誌と決定的な違いを見出せない。ただし、長谷川の論説の掲載に関して、OE誌に特徴的なのは、第一に、掲載時期が集中している点である。長谷川は、1935年3月に『新報』に「日本的性格の特徴」を発表（3回連載）したが、既にOE誌が創刊されていたにもかかわらず同誌に論説は掲載されていない。そして、OE誌に初めて署名入りの論説が掲載された1937年11月号以降、1938年12月号までの毎号に論説が掲載された²⁶⁾。第二に、OE誌掲載論説が『新報』に訳載されたことである。OE誌は『新報』の姉妹誌であるため、訳載は決して珍しくないが、大半は、『新報』掲載論説の英訳をOE誌に掲載する。一方で長谷川の場合は、初出がOE誌であり、掲載順が逆の論説がある。該当するのは、“JAPANESE AND CHINESE CIVILIZATION” (OE誌、1937年11月号) と “BUREAUCRACY IN JAPAN” (OE誌、1938年5月号) である。前者は、「日本と支那との文明」(『新報』1937年12月11日号「論説」、後者は「日本に於ける官僚政治」(『新報』1938年6月11日号「論説」と題して『新報』に訳載された²⁷⁾。

第2節 長谷川の対外発信に対する関心

さて、長谷川の外国語論説が発表された時期は、主に1935年から1940年である²⁸⁾。前述のように、1934年末までに、CJ誌、NIPPON、OE誌が創刊されていたが、長谷川の論説が掲載されるのは、1935年以降である。その理由

26) この間に論説の掲載欄は変更している。1937年11月号から1938年2月号までの掲載論説が「Special Contribution」、3月以降の掲載論説が「Leading Articles」である。「Special Contribution」欄は、1936年2月号から1937年2月号まで毎号に掲載され、その後1937年11月号から1938年2月号、1941年1、2月号に掲載された。

27) 前者は、論説の末尾に「本篇はオリエンタル・エコノミスト『十一月号』より訳載したものである」(『新報』1937年12月11日号「論説」、29頁)と明記されている。後者は、論説の冒頭に「本篇は本誌姉妹英文雑誌オリエンタル・エコノミスト五月号に掲載した長谷川氏の論文を転訳したものである。日本に於ける官僚政治は最近特に議論の的となつてゐる折柄、長谷川氏のこれに対する論説は教へられるところ少なくなり、茲に訳載して読者の参考に供する次第である」(『新報』1938年6月11日号「論説」、29頁)と記載されている。

28) 英文論説以外に、EDUCATIONAL AND CULTURAL BACKGROUND OF THE JAPANESE PEOPLE と JAPANESE NATIONAL CHARACTER がある。前者は、前年12月3日に開催され

として考えられるのは、1919年に大山郁夫らと雑誌『我等』を創刊し、その後、1930年に『批判』と改題した同誌が1934年に廃刊したことである。これ以降、長谷川は、フリーのジャーナリストとなった。それに伴い、時間的余裕が生まれ、日本研究にじっくりと取り組むことが可能となったことが挙げられる。それを裏付けるように、「日本的性格」という長谷川による造語²⁹⁾が初めて登場するのが、『読売新聞』1935年1月31日付(夕刊)「一日一題」掲載の「日本的性格の試練」である。

次に、長谷川が対外発信に対する考えを確認しておきたい。一つ目が、「英文日本百科全書の提唱」(『新報』1934年6月23日号「社会時評」)と題する論説である。長谷川は、西洋人が日本の「文化的伝統」や「伝統的持続」を正確に理解しておらず、日本文化に対する誤謬が生じていると指摘した。その原因の一つとして、日本に関する情報がほとんど外国語に翻訳されていない点を挙げた。そこで、英文版の「日本百科全書即ちエンサイクロペディア・ジャポニカの編纂」を提案した。このように、長谷川は、海外への情報発信の必要性を説いた。その彼が、OE誌の創刊に肯定的なのは当然である。

二つ目が、対談「長期戦下の我国際情勢——国民使節報告中心の座談会——」(『新報』1938年3月26日号「座談会」)³⁰⁾である。この中で、長谷川は、日本と中国の西洋人に対する自国の宣伝を比較して、中国の方が成功していると評する。それはなぜか。

当面の問題に就て宣伝するとか何とかいふのでなし、平生から支那の文明を高く評価させるやうに努めて、つまり支那及び支那人といふものに好い感じを與へることが巧いのぢやないだらうか。殊に支那の文化人は

た国際文化振興会主催の講演録を英訳した冊子である。後者は、国際観光協会の TOURIST LIBRARY シリーズの一冊として1942年10月に刊行された。

29) 長谷川は、この造語を「内容の規定のない、ただ日本人の心・形の特性と言うほどの意味」(長谷川如是閑「書後に」(『続日本的性格』(岩波書店、1942年)、『長谷川如是閑選集 第5巻』(栗田出版会、1970年)、282頁)で用い始めたと振り返る。

30) 出席者は、長谷川以外に、芦田均、鈴木文治、鈴木文太郎、笠間晃雄、杉森孝次郎、蜂谷輝雄である。

欧米人に向って長い文明国としての支那を認識させるといふことは、これも半分以上は過去のことで、今日の支那としては嘘といへば嘘だけれども余程支那文明を高く買はせてゐる³¹⁾。

その結果、西洋人が中国の古典や美術について一定の知識を持っており、その話題でコミュニケーションを図れる。また、中国文明が偉大であるという印象を西洋人に与えることにも成功した。その先入観が存在するために、仮に虚偽の情報を宣伝しても、一定の効果が見られる。一方、日本は中国と比べて宣伝に力を入れておらず、結果的に、西洋人に日本理解を深めさせることに失敗している。長谷川は、西洋人から日本の芸術や文学について質問されても満足に回答できない日本人が多く、中国と比較して「非常に日本は実質以下に見られるやうな損をしてゐる」、西洋人は「現在の日本人を文化的教養の高い国民と見ない。(中略) 向ふの外国人も亦日本人といふものゝ文化的地位を余り高く見ようとし^マない。中にはその点で馬鹿にする。過去の日本文化は相当尊重しても今の日本文明を高く買はない」と指摘して、「日本人の宣伝下手はどうかしなければならぬ」と危機感を露にした³²⁾。

「長谷川さん、日本の宣伝下手といふのは何か日本人として特殊な歴史的原因があるのですか」と問われたのに対して、長谷川は、「ある意味では宣伝下手の方がいい、じゃないか、とも思はれるがつまり悪い意味の宣伝は下手の方が宜いと思うて居るが、正しい事実を知らせることの出来ない宣伝下手は困る³³⁾」と述べ、事実に基づかない情報、発信者にとって都合の良い情報を宣伝することに疑問を呈した。それから、次のように述べた。

いはゆる宣伝下手は当面の不利をいふことはあるけれども、出鱈目の宣伝は下手の方がいい、でせう。例へば支那が非常に^マ出鱈目の宣伝をやつて

31) 前掲、「長期戦下の我国際情勢——国民使節報告中心の座談会——」、89頁。

32) 同前、90頁。

33) 同前、89頁。

あれで宣伝では勝ったとして、それが終局に於てどれだけ支那を益するか問題だと思ふ。唯だ世界の感情だけを捉へたところで、現実がそれに照応しなければ何の役に立たぬと思ふ。だから国家の現実を知らせる宣伝は必要だが、国家の実際がまるで反対なのに、虚偽を宣伝するといふ支那的の宣伝の方法は絶対にいけないと思ふ。だから日本は宣伝は下手だけれども、やってみる事が確かならばそれで宜い。その実際を知らせる宣伝はこれは絶対に必要でせうから、それも下手では困るけれども、支那流はいけない³⁴⁾。

このように、対外発信の必要性を説きながらも、その内容が「国家の実際」に沿うものでなければならぬ点を強調した。

第2章 対外発信の内容

前章では、長谷川の対外発信の意図について検討した。それを踏まえて、本章では、対外発信の事例として、CJ 誌、NIPPON、OE 誌に掲載された日本文化論を確認する。

各誌に掲載された論説の本数及び掲載時期は、CJ 誌が5本（1935年：2本、1936・37・40年：各1本）、NIPPON が10本（1935年：1本（仏語）、1936年・37年：各2本（36年は1本が仏語、37年は1本が独語）、1938・39年：各1本、1940年：3本）、OE 誌が14本（1937年：2本、1938年：12本）である³⁵⁾。

まず、指摘できるのは、これらの日本文化論の内容が、日本語による日本

34) 同前。

35) 各雑誌に掲載された載論文名と巻号数は、松田義男編「長谷川如是閑著作目録」（2009年6月14日、改訂2020年1月15日）（URL：<http://ymatsuda.kill.jp/Hasegawa-mokuroku.pdf>、最終確認日：2020年5月21日）で確認できる。ただし、同目録は、NIPPON、20号（1940年1月）掲載論説“Language of Delicacy”が漏れている。また、OE 誌1938年9月号掲載論説“The Origin of Political Parties In Japan”が、1939年9月号掲載論説としても挙げられているが、これは誤植である。

文化論の内容と重なることである³⁶⁾。ただし、既に発表している日本語の論説を英訳したものが各雑誌に掲載されたのではない。原文に該当する論説を特定できないからである。

次に、三誌の間で日本文化論の内容にやや違いが見られる。CJ誌とNIPPONを比べると、前者は日本文化論の総論、後者は各論と分類できる。NIPPONが日本文化から産業や建築など幅広い日本紹介であるという性格³⁷⁾の雑誌だったことから、具体的な事例に特化したと考えられる。これらの二誌に対して、OE誌に掲載された長谷川の日本文化論は、経済誌という雑誌の性格に合わせて、政治情勢や経済情勢を踏まえ、また、その分析も加えつつ日本文化を論じる点に特徴がある。

翻訳者については不明である。可能性として考えられるのは、①本人、②知人、③翻訳者（雑誌社所属）である。①について、長谷川の原稿や書簡などは、山本幸子（長谷川の姪）及び嘉治隆一からの寄贈により、現在中央大学が所蔵している。しかし、戦時中に自宅が全焼したため、戦前・戦中の史料がほとんど残されていないため、現物を確認できない。②について、中央大学「図書館蔵書検索システム CHOIS」で所蔵資料を検索すると、英文原稿が一件該当した。タイトルは、“The nature of Japanese civilization”である。「注記」には、「英文タイプ用紙 朱書書込み有り コロンビア放送原稿英文原稿 松本重治訳」と明記されており、長谷川は松本の訳に赤入れしたようである。③について、OE誌は専属の翻訳者を雇っていたことから、その手によって翻訳されたと推測される³⁸⁾。

36) 日本語の日本文化論の一部が、後に『日本的性格』（岩波新書、1938年）にまとめられる。同書は1941年9月までに11万2千部を売り上げた（松本重治「解説」、『長谷川如是閑選集 第5巻』（栗田出版会、1970年）、416頁）。

37) 前掲『名取洋之助と日本工房 [1931-45] 展覧会図録』、10頁。

38) 東洋経済新報社百年史慣行委員会編『東洋経済新報社百年史』（東洋経済新報社、1995年）、412-413頁。

第1節 「日本的性格」の骨格

前述のように、「日本的性格」の造語が最初に用いられたのは、1935年1月である。続いて、『新報』1935年3月2・9・16日号に掲載された論説³⁹⁾がある。後者の論説と同じ頃に執筆されたと思われるのが、“THE NATIONAL CHARACTER OF THE JAPANESE” (CJ誌、1935年3月)である。英文で発表された最初の日本文化論である。その内容は、これ以降の彼の日本文化論、「日本的性格」に関する論説を先取りするものであり、『日本的性格』(岩波新書、1938年)で提示されるものと重なる⁴⁰⁾。

- ①国民的性格は国民を取り巻く環境や社会状況に規定され、決して絶対的・厳格なものではない。
- ②日本文明の特徴は、古いものを保存する傾向と新しいものを積極的に包含する傾向が並立する点にある。
- ③日本人は外国の理念の受容を通じて自己の個性を強化した。
- ④日本国民は中庸を維持した。背景には両極端の相互的制約が作用していた。
- ⑤古代日本では中国人と朝鮮人を通じて中国の高度な文明が受容された。これらの人々は後に日本人に同化した。
- ⑥日本思想は現実的であり、客観的状況から遊離しない。現実的性格が文化の継続性を生み出した。
- ⑦現代日本人は祖先が達成したことに比べて偉大な成果を誇ることができていない。

39) 「日本的性格の特徴(上)」「新報」1935年3月2日号、「自主的進歩主義——日本的性格の特徴——(中)」「新報」1935年3月9日号、「現実主義的傾向——日本的性格の特徴——(下)」「新報」1935年3月16日号。

40) 長妻は、「日本的性格」を①「同化的傾向」、②「実際の生活の文明」、③「多元的性格」、④「全国民的の文明」に要約する(長妻、前掲「『日本的性格』前後の長谷川如是閑」、158頁)。

これ以降、三誌に掲載される日本文化論でも、上記のいずれかの特徴に言及される。以下では、これらの特徴以外の内容を取り上げる。

第2節 日本文明に対する誤解

繰り返し述べてきたとおり、長谷川は、外国人の日本観を正したいという意図のもとに、外国語による日本文化論を発表したと考えられる。そのため、外国人の日本観の誤りに言及することが多い。

まず、長谷川の日本文化論の特徴の一つとされる「文化接触」⁴¹⁾の意義が強調される。外国文化の流入は、人々の特性や生活を危険にさらすものではなく、むしろ、新たな文化との接触を経てより豊富にさせる。実際に日本は、古代よりそれを実践してきた。文化とは、それを育む人々の特性や特徴の表現であることから、正しい日本理解のためにも、日本文化に関心を寄せることを求めた(“YOU MUST KNOW ME AS I KNOW YOU”、NIPPON、6号、1936年3月)。その上で、長谷川は、日本文明の独自性を主張するが、西洋はもとより、中国文明とも異なる独自の発展を遂げた点を強調する⁴²⁾。例えば、歴史や文学に対する態度を挙げる。中国では、歴史記述に人間性の描写に欠け、また、ロマンチズムやリアリズムも希薄である⁴³⁾。そして、日中の文明の相違は、ギリシャとローマの文明の相違よりも大きいと評した(“PLURALITY OF ORIENTAL CHARACTER”、CJ誌、1940年2月号)。

西洋人の日本に対する批判として、日本が伝統を葬り去って西洋化に邁進しているというものがあるが、これに対して、長谷川は、日本人の保守的性格を引き合いに出して反論する。例えば、訪日外国人は日本の都市を見て失望する。外国文明が日本化されていないのは事実であり、大都市がモダンズ

41) 平石、前掲「如是閣の「日本回帰」について」、358頁。

42) 日中間の文明の相違については、前掲「日本的性格の特徴」でも取り上げられた。

43) このほかには、教育の独自性も挙げる。日本は公的教育制度が存在しない時代から、高い水準の文明が存在したが、それは独自の社会構造、家族制度、作法、慣習に基づくものであり、中国や朝鮮と異なることを強調する(“CHARACTERISTICS OF EDUCATION IN JAPAN”、CJ誌、1937年2月号)。

ム一色になったことを否定できない。また日本人は、公的生活でも近代の形式を採らざるを得なくなった。だが、保守主義を完全に喪失していない。私生活では、純粋な日本的なものを保ち続けるからであり、自宅では畳の上に座布団を敷いて座ることを一例に挙げた（“THE URBAN CIVILIZATION OF JAPAN”、OE 誌、1938年1月号）。また、芸術も引き合いに出す。日本の芸術作品は、最初の型が何世代にもわたって伝えられ、後の時代の創作物と共存しており、千年前の文化が今も生き続けている。「芸術は長く、生命は短い」という言葉は、日本にこそ当てはまる。そもそも、日本人の保守的性格を西洋人が見落とすのは、「余所行き」（表面上・外見上）の日本人しか見ていないことに原因がある（“THE CHARACTERISTICS OF PRESENT JAPANESE CULTURE”、NIPPON、23号、1940年8月）。長谷川から見れば、日本人の方が英国人よりもよほど保守的性格が強いと受け止められた（“BRITISH AND JAPANESE CIVILIZATIONS”、OE 誌、1938年6月号）。

第3節 日本文明の独自性

それでは、「文化接触」により発展してきた日本文明の独自性とは何か。ここでは、三点に絞って紹介したい。第一に、「哲学なき哲学」、第二に、芸術と生活、第三に、国民的一体性である。

まず、「哲学なき哲学」である。長谷川は、日本人の外国文明の受容について、実用面では創造性を発揮させたが、知性面ではそれに欠けたと指摘する。日本人は外国の知性に頼らずに、自らの知恵や英知に依拠することで事足りたからである。そのため、理論文化を作り上げる能力が育たなかった（“THE JAPANESE AND FOREIGN CULTURE”、CJ 誌、1935年9月号）。この点は、中国文明と比較しながら説明される。日本で形而上学が発展しなかったのは、日本では哲学の体系化ではなく哲学の精神が具体化されるからであり、「思想体系としての哲学」よりは、「行動体系としての哲学」をもつのが日本人の特徴である（“JAPANESE AND CHINESE CIVILIZATION”、OE 誌、1937年11月号）。また、日本の哲学を観念的・知的なものでなく、生活から

離れたものでもない、いわば哲学なき哲学としたが、これは英国と共通する (“BRITISH AND JAPANESE CIVILIZATIONS”、OE 誌、1938年6月号)。その一方で、体系的な哲学を持たなかったことは、言葉の厳密さに欠けることを意味した。だが、日本人にとって言葉とは、心理的・感情的作用から生まれたものであり、美的、倫理的でもあることから、そもそも、哲学的・科学的定義のような厳密さに馴染まない (“Language of Delicacy”、NIPPON、20号、1939年1月)。

次に、芸術と生活である。あらゆる芸術的創作物は、生活の洗練、改良と密接に関わる。国民は自身の生活の型を持つように、「内部芸術」(internal art) も同様に特別な型を持つ。型同士の優劣は付けられないが、確実に言えるのは、いかなる国民の芸術や創作も、人々の生活と密接に発展したことである。日本の芸術は、内部芸術と密接に関わっており、大衆生活における美の感覚が、直接的に創作物の芸術的な趣に反映されている (“Life and Art”、NIPPON、11号、1937年5月)。また、日本芸術の基本的性格は、その感性の基調が日常生活の感性と密接に結びつく点にあるため、この感性を把握できなければ、日本芸術を理解できない。特に、「産業芸術」(industrial art) には、日本芸術の感性が純粋な形で残されている。さらに、東洋や西洋建築は、巨大で複雑さを特徴とするが、日本建築は人力の質的表現に特徴があり、例えば、柱は四角で白木を用いており、最も自然で完全な形を追求する (“THE INDUSTRIAL ART OF JAPAN”、OE 誌、1938年4月号)⁴⁴⁾。興味深い事例は、戦闘の美化である。日本人にとって芸術は、生活の型の美化にほかならず、美的感覚が日常の行動や生活道具の中に表現されているが、これは日本刀や鎧にも反映される。これらは実用性を越えて、つまり、攻撃

44) 長谷川は、素材のありのままを生かす点に日本人の保守的性格を見出している (“BRITISH AND JAPANESE CIVILIZATIONS”、OE 誌、1938年6月)。また、質的表現を可能とする日本人の器用さに注目したり (“Heads, Hands And Machinery”、OE 誌、1938年8月号)、茶道の作法、精神や寺院や神社のデザインを引き合いに出したりして平易、質素こそ、日本文明の特質であると論じた (“JAPANESE CHARACTERISTICS AND THE CEREMONY OF TEA”、OE 誌、1938年3月号)。

や防禦の実際の必要性を越えて装飾されていたからである。また、日本人は戦闘に際して、倫理的規範、礼儀作法、美意識を有する。それは味方のみならず敵にも及んでおり、敵対している二つの勢力は、実は同一の倫理規範や美的意識の下に置かれていた（“Beautifying War”、*NIPPON*、16号、1938年10月）。

最後に、国民的一体性である。長谷川は、日本がかなり早い段階で民族国家を実現したとみる。その結果、家系が重んじられるようになり、厳格な血統により形成される貴族が、時の支配者に権威の基礎を提供する存在となった。武士が台頭して以来、公家と武家が併存したが、分断されることなく一体性が保持された。明治新政府でも最高地位を公家が担ったが、これは古代からの伝統たる威厳が存在していたことを裏付ける（“Aristocracy IN Japan”、*OE* 誌、1938年7月号）。日本における国民的一体性は、外国から見るとドイツやイタリアに代表される全体主義と同一に映る。だが、長谷川はそれを否定する。日本人は、古代から国民的統一を実現し、中世には形式的、実質的に統一国家を成していたため、民族対立とは無縁で、軍事・政治対立も決定的な分断を生じさせなかった。確かに、日中戦争以降、ヨーロッパの全体主義国と類似の政策を採るものの、日本の場合は何世紀もかけて発展した国民的特質とそれに基づく政策であって、ヨーロッパのそれと区別される（“Characteristics of the Japanese National Unity”、*OE* 誌、1938年11月号）。また、日本を全体主義と見るのは決して誤りでないが、その場合、ヨーロッパで用いられる意味の全体主義を指すのではない。日本は、いかなる「イズム」もなしに、そして、国民的伝統の深い意識によって全体的一致を実現しているからである（“Japan and Totalitarianism”、*OE* 誌、1938年10月号）。このような国民的一体性を日本の知識人はよく自覚している（“The Intellectual Class of Japan”、*OE* 誌、1938年12月）。

おわりに

本稿では、長谷川如是閑の日本文化論を対外発信の観点から再検討した。長谷川が、英文による日本文化論を発表したのは、外国人の日本理解に誤りがあり、誤解がさらなる誤解を生みだす悪循環に陥る結果、国際社会における日本及び日本人の「自由」が大きな制約を受けていると考えたからである。そこで、日本文化論を通して対外発信に関わった。

対外発信の必要性を感じたり、実際に行動したりした点は、1930年代の自由主義者に共通していた。政治情勢や経済情勢に起因する日本批判が主に列強を中心に展開され、しかも、経済面では保護貿易の実施による実害が生じていたからである。このように、国際社会における日本及び日本人の「自由」の領域が狭められることに対する反発、危機感、苛立ち、そして憤りが、自由主義者をして対外発信へと駆り立てたと考えられる。

こうした動機に基づく対外発信は、自由主義者に限られたものではないと考えられるが、それでは、自由主義者の対外発信の特徴とは何か。それは、観念論に依拠して外国人読者を煙に巻くのではなく、また、実状を隠蔽して虚偽の情報を一方的に垂れ流すのでもなく、外国人読者を説得させる意図を持ちつつ、裏付けのある情報を基に論陣を張ったことである。もっとも、長谷川の日本文化論を含めて、自由主義者の対外発信が、外国人の日本観を是正するという当初の目的をどの程度達成したのかを判断するには、読者の反応を検討しなければならない。この点の解明は、今後の課題としたい。